奈良県立商科大学「研究季報」第3巻 第1～3合併号（1992年12月10日）

# ラテン語は生きているか

## ― 現代ラテン語事情 ―

谷　　栄一郎

はじめに
Ⅰ　銘文、モットーに見るラテン語
Ⅱ　自然科学におけるラテン語
Ⅲ　英語とラテン語
Ⅳ　広告、宣伝のラテン語
Ⅴ　ヴァチカン
Ⅵ　現代ラテン語による著作
Ⅶ　ラテン詩
Ⅷ　ラテン語放送
まとめ

### はじめに

ラテン語とは古代ローマ人の言葉であり、ローマ帝国、正確には西ローマ帝国が滅んだときラテン語は滅んだのだと考えられやすい。476年確かにゲルマン傭兵隊長オドアケルのため西ローマ帝国は滅亡するが、別にそれによってローマ人がラテン語を忘れたわけではなかった。オドアケルを倒した東ゴート王国のテオドリックの下で活躍した文人としてボエーティウス、カッシオドールスは有名である。ただ民族移動の混乱期に、帝制期のすぐれた学校制度が維持される見込みはなく、大衆の話していたラテン語は規範を失って少しづつ変化していく。中央政府を持たなくなった旧ローマ帝国の民衆たちは、それぞれの地域に応じて独自の方言を発達させ、いわゆるロマンス語化が進行していく。この混乱の時期に共通語としてのラテン語を守ったのは教会であった。400年頃完成したラテン語聖書ウルガータはキリスト教正典として、諸侯の改宗の進行とともに西ヨーロッパの国々に宣べ伝えられていく。大部分の王国がキリスト教化していくにあたり、行政上もラテン語は重要な役割を果たした。ただローマ帝制時代から続けられた異教的教育は放棄されたため古典ラテン語からの堕落は避けられなかった。シャルルマーニュはキリスト教を保護するとともに各国の学者を宮廷に招き、学問の復興を図った。カロリング・ルネッサンスと言われるのがそれで、その成果はエインハルトのシャルルマーニュ伝を読めばわかる。それは中世の堕落したラテン語ではなく、古典のスウェートーニウスの伝記を読んでいるような気にさせられるからである。ただこの学問の復興も長くは続かず、またヨーロッパ中に広まったわけではなかった。それぞれの国がそれぞれの地域の特徴を持った中世ラテン語を発達させていった。14世紀になってイタリアの人文主義者たちはそれまで人々が使ってきた中世ラテン語は古典ラテン語に較べると著しく堕落していることに気がついた。一方ではスコラ哲学として知られる神学を始め多くの分野で作品を生み出してきた中世ラテン語ではあったが、一挙に厳しい批判に曝されることになった。古典期の多くの作家が発掘され、特にキケロの作品は最高の模範とされ、以後のラテン語の文体をほぼ決定づけることになった。古典ラテン語への復帰はラテン語の統一をもたらし、学問の相互交流を促進した。17世紀はおびただしい著作がラテン語でなされたが、民族語の使用が盛んになるのもこの世紀である。John Miltonはクロムウェルのラテン語書記官として有名である

が、彼の死後国際共通語としてはラテン語はフランス語に地位を奪われていく。18世紀の始めNewtonはその大著Principiaをラテン語で書いたが、彼の日常の言語は英語であった。日常にもラテン語を使っていたBaconとは時代が変わってきた。18世紀、大学は依然としてラテン語の砦であり、ショーペンハウエルはラテン語による授業を懐かしさをこめて書き残している。19世紀になるとラテン語の使用は大学内でも限られてくる。1801年数学者のガウスはかの有名な数論研究をラテン語で書き、1841年には地磁気の強度に関する著作を発表している。ハンガリアの議会では1848年までラテン語で審議が行われていた。社会学の草分けであるルネ・ヴォルムスは「社会学の本質と方法」を1896年に発表した。その他19世紀に書かれたラテン語の著作は多岐に渡っているが、それらはすべて、過ぎ去った過去のこととして考えることができる。20世紀になって教育方針に重大な修正が加えられ、一般教育から古典語の時間が削られ、代わって自然科学やその他の教養科目が大きな比重を占め始めた。第二次大戦後20数年の中にラテン語は中等教育の必修科目から外され、選択の時間数も漸減していった。世界的にラテン語の水準が低下したことは疑う余地がない。しかし、それでもラテン語は果して死語であると断定できるのであろうか、現在の日本も含めて、ラテン語の現状を検証してみたい。

## I　銘文、モットーに見るラテン語

スイスは典型的な多民族国家でドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンチュ語の４カ国語が公用語となっており、紙幣にはこの４カ国語が印刷されている。標準語というものはないので１カ国語の表示だけで済ませたい場合は非常に困るわけであるが、切手の場合ラテン語でHELVETIAと表示してある。硬貨の場合はやはりラテン語でスイス連邦共和国を意味するCONFOEDERATIO HELVETICAが使われている。車のナンバープレートにはこの略称としてCHが使われている。スペインにドライブで出かけたとき、「あの車はどこの国のだろう、チリかな」と不思議がられるのが愉快であったとスイスの友人から聞いたことがある。外国人にわかりやすいか、どうか、そんなことよりも他言語を話す自国民の感情を害しないこと、それが一番大事である。

イギリスの硬貨の表にはエリザベス女王の肖像とともにD・G・REG・F・Dの銘が入っている。これはDei Gratia Regina Fidei Defensatrixの略で「神の恩寵により、女王、信仰の守護者」という意味である。アメリカの１ドル紙幣の裏面左側に神の目が描かれており、その上にANNUIT COEPTIS（彼は企てを嘉された）の銘がある。その下側にはNOVUS ORDO SECLORUM（新しき世紀の秩序）の文字がみえる。裏面右手には鷲の紋章が描かれていてその上にはやはりラテン語でE PLURIBUS UNUMとある。E PLURIBUS UNUM（多くのものから一つを）は言うまでもなく、アメリカ合衆国のモットーである。1992年５月18日発行のタイム誌の表紙の見出しはThe Two Americas／E Pluribus Unum？であった。アメリカではラテン語はもはや必修ではなく、知らない人も多いのだが、少なくともタイムを読むインテリはこのラテン語のモットーを正確に理解できるのであろう。メダルの銘にもラテン語はよく使われている。例えば、ノーベル平和賞のメダルにはPRO PACE ET FRATERNITATE GENTIUM（諸民族の平和と友愛のために）と刻まれている。ラテン語の簡潔さは標語に適しており、バルセロナ・オリンピックにおいてもALTIUS CITIUS FORTIUS（より高く、より速く、より強く）の標語はよく見られた。

## II　自然科学におけるラテン語

### １．化学

古代において元素と言えば水、空気、火、土の４種類だけであったが、近代になって研究が進むにつれ、元素の概念は次第に厳密なものとなり、18世紀ラヴォアジェによる酸素の発見、キャベンディッシュによる水素の発見により、近代的元素観が確立した。以後次々と新しい元素が発見されたがそれらの記号は一定しなかった。新しい原子論を唱えたドルトンは錬金術時代の絵画的記号を多用している。19世紀初頭にスウェーデンの化学者ヴェルゼリウスがラテン語の頭文字で表すことを提案した。「化学の教科書」から引用すると、

「この記号として、われわれは物体のラテン語の名称の頭文字を選んだ。同じ頭文字で多くの物体の名が始まる場合は、最初の頭文字に、それぞ

れに共通に入っていないで持っている文字を付け加える。そのようにして、例えばC＝炭素（Carbonicum）、Cl＝塩素（Chlorum）、Cr＝クロム（Chromium）、Cu＝銅（Cuprum）、Co＝コバルト（Cobaltum）と表す。」[1]

フランスのブダンはフランス語の頭文字で置き換えようとしたが、ヴェルゼリウスはこれを「自国民だけのためにする虚栄」として強く非難している。[2] 民族主義の高まりの中で、ヴェリゼリウスの案が広く受け入れられたのはやはりラテン語の中立性がアピールしたのであろう。元素の英語名とラテン語名は似ていることが多いが、鉄Fe（Ferrumより、英語はiron）、鉛Ｐｂ（Plumbum、英語はlead）のように全く異なっている場合もある。ただ、英語にはferroconcrete（鉄筋コンクリート）、plumber（配管工）などラテン語の派生語があり、英語国民にとって違和感のあるものではない。

## 2．動物・植物学

動物、植物の学名がラテン語であることはよく知られている。これはリンネが「自然の体系」で唱えた２名式命名法が簡便なため広く学会に受け入れられたためで、ラテン語による呼称自体は古くから行われていた。ただ古典ラテン語式に名前をつけるとどうしても長たらしくなってしまう傾向があった。例えば江戸時代に日本に来た博物学者のケンペルはラテン語で「廻国奇観」という著書を表したが、この書の中で取り上げられている日本の植物の桐はAlthaea arbor dipyrena, flore digitalis aemulo（花はジギタリスに似て、２つの莢を持つ木立性のアオイ）となっているが、これはやがて２名法によりPowlaunia tomentosaとなった。このPaulowniaを属名、２番目のtomentosaを種小名と呼ぶ。外国の植物が日本に輸入される場合、最初はタイサンボクやユリノキのように和名が付けられ、その和名が普及することが多かったが、ダリア、コスモスなどのように属名が仮名書きされ、それがそのまま普及するものもあった。植物学者によって標準和名が付けられても、それが長たらしいものだと園芸家は属名だけで呼び、それが普及してしまうことも多い。公園や道路脇の植え込みによく植えられているハナゾノツクバネウツギ（もしくはハナツクバネウツギ）も一般にはアベリアで通ってしまっている。分類学的にAbelia（アベリア）と言ってしまうと、日本の山によくあるツクバネウツギやコツクバネウツギまで含んでしまうが、学名をまったく知らない人には問題はないのであろう。同じように属名だけで呼ばれている外来植物にはアカシア（Acacia）、アネモネ（Anemone）、カンナ（Canna）、サルビア（Salvia）、ゼラニウム（Geranium）、プリムラ（Primula）、ベゴニア（Begonia）、その他、洋蘭のデンドロビウム（Dendrobium）、シンビジウム（Cymbidium）などがよく知られている。これらはすべてラテン語をそのまま仮名書きしたものである。今日の植物書はほとんど現地の言葉、もしくは英独仏などの近代語で書かれているが、新種を公式に記載発表するには国際植物命名規約により、「ラテン語の記載文または特徴記述を伴わなければならない」ことになっている。例としてたんぽぽの新種の記載文の一部を引用する。

Taraxacum aridicolum Railonsala,n.sp.

Planta sat alta, robusta, suberecta. Folia oblonga-lanceolata, obscure viridia,, subglabra, petiolis pallidis, alatis-alatissimis, nervis medianis validis, pallidis, araneosi. ― 中略 ― Anterae polline carentes（？）. Stigmate mellito-lutea. Achenium maturum incognitum. -Typus in Herbario musei fennici, Helsinki, asservatur.[3]

（丈はやや高く、丈夫で、やや直立。葉は長楕円形または皮針形、目だたない緑色で、やや毛がある。葉柄は色が薄く、翼があるか、もしくは著しく翼がある。中脈は発達し、色は薄く、クモの巣状。――中略――

葯に花粉がない（？）。柱頭は蜂蜜状の黄色。成熟した痩果は知られていない。正基準はヘルシンキのフィンランド自然史博物館腊葉標本室。）

記述は非常に厳密で、ラテン語が正確な描写に適しているを示すものであるが、構文の形式化が著しく、文の根幹である動詞が完全に姿を消してしまった。植物学者の間でだけ通用するjargon（専門的仲間言葉）になってしまった観がある。

## 3．医学と薬学

解剖学用語も動植物の学名と同じようにラテン

語の学名を使うことが多い。骨、筋肉、血管、神経等実に細かく、名前がつけられている。幾つかを例を挙げると、

Fossa glandulae lacrimalis（涙腺窩）
Articulationes sternocostales（胸肋関節）
Aortae suprarenales superiores（上副腎動脈）
Nervus pectoralis lateralis（外側胸筋神経）

カルテと処方は長い間ラテン語で書かれてきたが、初めドイツ語に、ついで英語に取って変わられるようになった。薬局方も19世紀ぐらいまでは全文ラテン語で書かれていたが、20世紀になってからはほとんどが各国語で書かれるようになった。ただ記載の薬品名だけは依然としてラテン語で、市販されている日本薬局方の薬品のラベルにも大文字でラテン名が書かれている。よく知られている例を挙げると、赤チン（マーキュロクロム液）はSOLUTIO MERCUROCHROMI、ヨーチン（希ヨードチンキ）はTINCTURA IODI DILUTA、アンモニア水はAQUA AMMONIAEとなっている。

## Ⅲ　英語とラテン語

ラテン語から英語に入ったラテン語の数は夥しい。ローマから新しい文物が入るとき、その事物を指すラテン名も流入したからである。イギリスの場合ルネサンス以来のラテン語志向性は強く、フランス語などよりラテン語の原型に近い語が多い。12ケ月の名称はラテン語からほぼすべてのヨーロッパ語に借用されているが、フランス語ではjanvier, fevrierというのに対し、英語のJanuary、Februaryはラテン語のJanuarius、Februariusに非常に近い。星座のAries（雄牛座）、Leo（獅子座）、Virgo（乙女座）、Gemini（双子座）などもまったくラテン語のままである。純粋の英語ならば当然Ram、Lion、Maiden、Twinなどと言うべきところである。日常の英語でcanis（犬）、felis（猫）等ラテン語の学名がそのままつかわれることは少ないのであるが、その形容詞形となると話は別でcanine（犬の）、feline（猫の）はかなりの頻度で使われる。例えば犬歯というのは英語でcanine toothであるし、ネコ科の動物はfeline animalsといった具合である。これは別に学名に限らず、一般の名詞にも当てはまる。太陽、月はsun、moonでいいわけで、ラテン語のsol、lunaは使われないが、形容詞として使う場合、例えば太陽エネルギーという場合、sun energyとは言わず、ラテン語の形容詞solarをそのまま借りてきてsolar energyと言う。月着陸船もmoonmoduleではなく、ラテン語の形容詞lunarを借りてきてlunar moduleという。ラテン語は英語の語彙の中で生き続けていると言えるであろう。

## Ⅳ　広告、宣伝のラテン語

商品名に外国語を使うことはますます増える傾向にあるがその中にはラテン語のものもときどき見られる。一番よく目につくのは車の名前であろう。例えば次のような名前はラテン語と考えてよい。

インテグラ（INTEGRA　完全な）
カルタス（CULTUS　生活の洗練、文化）
クレスタ（CRESTA　とさか）
カペラ（CAPELLA　ヤギ）
コロナ（CORONA　冠）
ジェミニ（GEMINI　双子）
スープラ（SUPRA　～の上を）
ファミリア（FAMILIA　家族）

雑誌などもラテン語名がついていることがある。例えば料理雑誌のエッセはラテン語ESSEで（食べる、ある）を意味する。社会問題を扱った雑誌サピオは「味わう」「物事の真理を探る」という意味のラテン語SAPIOから取ったとしているがこれは1人称単数形の形で（私は味がする、私は分別がある）という少し変な意味になってしまっていることに編集者は気づいていないようである。化粧品名にも割合ラテン語は使われている。石鹸でラックスLuxというのがあるが、これは「光」の意味である。スキン・クリームのニベアNiveaは「雪のように白い」ということだが、実際そんなに白くなるのであろうか。

欧米では商品名だけでなく、広告文すべてがラテン語で書かれることがある。ドイツのAUDI社はその名前自体「聞け」という意味のラテン語から取っているのであるが、次のようなラテン語の広告文を雑誌に掲載したことがある。

Duorum et septuaginta vi equorum impulsus centena milia passuum-vel CXLVIII chilometra-singulis horis pervolare potest. Atqui olei non nisi octo litra per centum chiliometra

consumenda sunt et quattuor partes: Quem plus praestare, consumere minus ergo invenies.[5]

（72馬力のエンジンで1時間に100マイル既ち148kmを快走。それでいてガソリン消費は100キロにつき8.4ℓ。旧型より性能は向上、燃費は減少していることがおわかりになるでしょう。）

V　ヴァチカン

第2ヴァチカン公会議でラテン語のミサの放棄が決定された後もヴァチカンの公用語は依然としてラテン語である。会議において実際に使用される言語はイタリア語が多いと思われるが公文書はラテン語で起草されることになっている。機関誌L'Osservatoreなどはすべてイタリア語で書かれてはいるが法王から各国の司教に出される回勅（Encylica）などもラテン語が普通である。ヴァチカン公文書の例として「エキュメニズムに関する教令」を引こう。

Unitatis redintegratio inter universos Christianos promovenda unum est ex pracipuis Sacrae Oecumenicae Synodi Vaticanae Secundae propositis. Una enim atque unica a Christo Domino condita est Ecclesia, plures tamen christianae Communiones sese ut Iesu Christi veram haereditatem hominibus proponunt; discipulos quidem Domini omnes se esse profitentur at diversa sentiunt et per diversas ambulant vias, ac si Christus Ipse divisus est mundo atque sanctissimae causae praedicandi Evangelium omni creaturae affert detrimentum.

（すべてのキリスト者の間の一致再建を促進することは、聖なる第2ヴァチカン公会議のおもな目的の一つである。主キリストによって設立された教会は単一・唯一のものであるが、数多くのキリスト教団がイエズス・キリストの真の継承者として人々の前に現われ、皆自分が主の弟子であると公言しながら、あたかもキリスト自身が分裂しているかのように、考えが異なり異なった道を歩いている。このような分裂は明らかにキリストの意志に反し、また世にとってはつまずきであり、すべての被造物に福音をのべ伝えるという最も聖なる使命にとっては妨げとなっている。）[6]

hereditasがhaereditasとなっているなど、正書方は改善されていないが、非常に読みやすいラテン語である。communio（教団）、scandalum（つまずき）、Evangelium（福音）、creatura（被造物）など古典ラテン語には見られない用語とは言え、Vulgataから近代語に入り、一般に馴染みのある語ばかりである。ラテン語はローマ・カトリックの長い伝統に基づき、現代の思想をも十分に盛る公用語として機能していることが伺える。ただやはり第2ヴァチカン公会議で典礼、秘蹟において現地語の使用を認めたためヴァチカンでの公文書以外のラテン語の使用は極めて限られたものになってしまった。

**VI　現代ラテン語による著作**

西洋古典関係の学術的なものでは今日でもラテン語で書かれるものがかなりある。ドイツのトイプナー古典双書、イギリスのオックスフォード古典双書は序文、読みの異同などすべて伝統的にラテン語のままで書かれるものがかなりある。近代語で書かれる古典雑誌でもオランダ、ポーランド、チェコなどのものにはラテン語による書評や論文が今でも時折見られる。ラテン語の辞書では古典期のすべての出典を網羅するThesaurus Linguae Latinaeはまだ全巻完成には至っていないが語義の説明がラテン語でされていることは有名である。小型のものではDominicus Boのホラーティウス辞典も序文、語義の説明等すべてラテン語でなされている。

戦国時代日本にやってきて精力的に布教に務めたイエズス会宣教師の活動はよく知られているが、そのラテン語による著作活動は衰えを見せていない。インスブルク大学の教授でもあったイエズス会のJ. Donatはカトリック哲学を弁護する意図を持って「倫理学」「論理学」「存在論」「心理学」「宇宙論」「弁神論」など自然科学から神学に及ぶ数々の著書を公にした。「宇宙論」から地球を扱った部分を引用すると、

Terra nostra est immensa sphaera, cuius diameter circ. 13.000 km extenditur, ut, cum hoc diametro comparata tum profunditas maris tum altitudo montium fere penitus dispareant. Circuitus autem peripheric us terrae 40.008 km efficit. Antiqui philosophi plerum-

que putarunt, terram esse planum oceano circumdatum vel in eo natans; ideo homines in parte terrae adversa habitantes sive antipodes non admiserunt. Eade m opinios. Patres et pleosque viros doctos aevi medii tenuit, et perduravit, donec primus Magalhaens et postmodum alii terram circumvecti. sunt. Sed iam Pythagorei et Plato existimarunt et Aristoteles legitimis argumentis demonstavit, terram esse sphaeram; cuius sententiam Albertus M. et Thomas eiusque discipuli adoptarunt.[7]

（我々の地球は巨大な球体で、その直径は1万3千キロに及び、この直径と比較すれば海の探さや山の高さはほとんど消えてしまう。地球の円周は40,008キロになる。古代の哲学者たちは大抵地球は平で大洋に囲まれている、もしくは大洋に浮いていると考えた。キリスト教教父や中世の大部分の学者たちも同じように考え、マゼランや他の航海家が地球を一周するまで考えは変わらなかった。しかし、すでにピュタゴラスやプラトンが球体説を唱え、アリストテレスも正しい理論で地球が球体であることを証明していた。アルベルトゥス・マグヌスやトマス・アキナスとその弟子たちもこの説を取っていた。）

近代の人名は無変化のままであり、近代の造語で誤解の恐れがあるものはドイツ語、フランス語を( )内に添えて、誤解のないように気をつかっている。構文の簡潔さとも相待って、明瞭なことこの上なく、読んでいてつっかえるところがほとんどない、現代ラテン文の模範の一つと言ってよいであろう。日本に関するものでは同じくイエズス会のシュッテ師が「日本イエズス会史序論」[7]という1000頁を越える大著を著している。そのラテン語は簡単ではあるが優雅さを欠いており、ポルトガル語、スペイン語の多数の史料などは原文が引用されているだけでラテン語の執筆は何のためかと疑問が残る。

同じくイエズス会のフィリッポ・ソッコルシは若干哲学的考察が入るものの数学、物理学の難解な問題を取り上げた「非ユークリッド幾何学と空間」「量子物物学」「物理学における人間の認識力について」[8]などの非常に専門的な著書を公にしている。ソッコルシのラテン文は明瞭ではあるが、かなり単調であり、Lex Avogadro（アヴォガドロの法則）のように固有名詞が無変化であるのみならず、gas nobilia（希ガス）のように普通名詞まで無変化で扱うことが多く、優雅さからはほど遠いものとなっている。

西洋古典を扱ったラテン語の著作で最近の名著と言えるものはやはりイエズス会の人でブラガ大学教授アントニオ・フレイレの「ラテン語文集Ⅰ」[9]であろう。この著作は古典ラテン文学の主な作家を取り上げた文学史とギリシア悲劇論、ラテン語教育論等をまとめたものである。中でも文学史は優雅なラテン語で書かれ、作家評も核心を突いている。同氏はまたポルトガルの国民叙事詩カモインシュの「ウズ・ルジアダス」全編をラテン語訳するという大業を成し遂げた。ただ古典ラテン語のヘクサメトロス（6韻脚）ではなく、ポルトガル詩に近い10音節詩8行で1連とするものである。

国民叙事詩と言えばフィンランドの「カレワラ」を連想する人も多いであろうが、その「カレワラ」もフィンランドのユベスキュレ大学トゥオモ・ペッカネン教授によって見事にラテン訳された。この訳も古典的ヘクサメトロスではないが、もとのフィンランド語のリズムに非常に合っているという。

古代でもラテン語で書かれた小説と言えるものは非常に少なかった。ペトローニウスの「サチュリコン」、アプレイユスの「黄金のロバ」が小説と言えるかも知れないが、その他にはほとんどない。近代になって小説が書かれ始めた時、それがラテン語でなされることはほとんどなかった。20世紀になってラテン語で小説を書くという試みはほとんどされなかったが、最近はさまざまな翻訳や、ラテン語オリジナルの小説も発表されている。ルネ・サクサの「空の星は何処にも輝く」はロッホ・ハビツキーによって、さらに20世紀ラテン語の第1人者カエレスティス・アイヒェンゼーアによってラテン語に翻訳された。この訳は古代から近代に至るあらゆるラテン語語彙を縦横に駆使した大変な労作であるが、普通のラティニストには辞書なくして判読は難しい。一部引用する。

quae (Franco-gallae) gressibus quasi oscillantes specularium illecebras praetergrediuntur aut in subterraneae ferriviae vomitoria demerguntur.[10]

（彼女たちはゆらりゆらりとショーウインドーのそばを通り過ぎるか、メトロの入口にもぐっていった）

ここでoscillans, specularia, vomitoriaなどの単語は古代の文献には出てくるが非常に稀な言葉である。こういう言葉が頻出するとなかなかイメージがわかないものである。現代小説をラテン語にすることのむづかしさを痛感する。一方、オランダの女流小説家ベッラ・ストゥーリンガが自分の短編を自らラテン訳した「ほとんど秋」は著者自身が小説家であるためか、ラテン語にも不自然さは非常に少なく、大変わかりやすい。一部引用する。

Coenautocinetum nunc alium aspectum praebet atque hora octava matutina, cum ad officium meum eo vehi soleo. Sedes occupatae sunt a matribus cum liberis. Quia situlas et palas parvas secum portant, eos ire ad litus maris puto. Etiam multi homines veteres adsunt. Omnes videntur laetari. Ego sola descendo in statione ante nosocomium.(11)

（今やバスは私が朝8時に会社に行くとき乗るのとは異なった情景を呈していた。座席は子供を連れた母親たちで占めていた。小さなバケツとシャベルを持っていることから、浜辺に出かけるのであろう。老人も多かった。皆楽しそうであった。病院前で降りたのは私ひとりであった。）

原文のオランダ語は筆者にはとても理解できそうにないが、ラテン語を通して感動が直に伝わってくるのは素晴らしい。

児童書のラテン語訳は恐ろしいほど出版されている。古くはベアトリックス・ポッターの「ピーター・ラビット」やサン・テグジュペリの「星の王子様」に始まり、「熊のプーさん」、「オズの魔法使い」、最近はフランスの人気漫画タンタンのシリーズの「黒い島」の他、最も人気を読んでいるのはカエサルの時代のガリアを舞台にしたアステリックスのシリーズで、もう20編を数えている。

## Ⅶ　ラテン詩

乃木大将にしろ、夏目漱石にしろ、昔の日本の軍人、文人は漢詩の嗜みを知っていた。今日でも漢詩を愛好する人は絶無ではないが、普通我々が目にするのは年賀状に詠んでいる人をたまに見るぐらいで、現代の漢詩集が普通の書店に並ぶなどということはおよそ考えられない。ラテン語の詩集はどうか、戦後出版された詩集だけでも数百を数えるが、現代ラテン語詩人のアンソロジーの例としてシュトットガルト新聞の編集者Joseph Eberleが編集したViva Camena（生きた歌神）を取り上げよう。Eberleが世界中のラテン語愛好家に呼びかけたところ、世界中から多数の詩が寄せられ、その中から50人、238編を編集した。カトリックの聖職者にラテン語の宗教詩を書く人が多いのは当然であるが、この書は世俗のテーマを扱ったものだけを採用している。あるものは古典詩の韻律で、あるものは中世の押韻詩で、現代のさまざまな題材を取り上げ、実に見事に心象風景を表現している。ラテン詩を訳すなどは愚考であるが、子守歌を一つ取り上げよう。

CANTICULUM
Dormi, mi, fili, dormi —
sunt qui dicunt
vitam beatam esse:
dicunt, dicant, nesciunt.

Dormi, mi fili, dormi —
veniet dies
quo tibi erit
larga, largissima quies.

Dormi, mi fili, dormi —
aderit mox
mihi tum tibi
ultima nox.(12)

（眠れ、わが子よ、眠れ、
人生は幸せだと
人は言う、人は言う。
言うがよい、彼らは知らぬのだ。

眠れ、わが子よ、眠れ、
やがてお前が
豊かな、限りなく豊かな
休息を持つ日がやって来る。

眠れ、わが子よ、眠れ、
やがて私に、

ついでお前に
最後の夜、最上の夜が訪れる。)

世界的に名高いラテン語コンクールとしてはヴァチカンのカトゥッルス・コンクールとアムステルダムのフーフト・コンクールがあり、毎年選考が行われ、優秀作品は前者はラテン語雑誌ラティーニタース誌上に、後者は王立アカデミー自身が出版、発行している。

### Ⅷ ラテン語放送

1931年2月12日ローマ法王ピウス11世はヴァチカン放送のマイクの前に座り、ラテン語のメッセージを読み上げた。これがラテン語放送の初めである。イタリア語なまりのラテン語であるためイタリア人以外の人には聞きとりにくいラテン語であったが以後定期的にラテン語の番組が続けられた。ヴァチカン以外ではカイロの熱心なフランス人教師ジャン・ラプヌイユによる放送や、ブダペストでの放送が伝えられるがそれがどの程度のもので、どれほどの期間続けれたのかなどはっきりしない。ヴァチカン放送は第2ヴァチカン公会議(1962－1965)以来ミサや決まり文句等を除いてラテン語放送は中止された。1989年9月1日、国営フィンランド放送がラテン語ニュースの放送を始めたのは画期的なことであった。1週間に5分間だけと短時間であるが、世俗のニュースが短波で全世界に放送される意義は大きい。phがf、2重母音のae、oeが長母音のeとして発音されるなど、復古式発音に慣れている人には若干とまどう所もあるが、母音の長短、アクセントは正確に守られていて非常に聞き取りやすい。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などには古典ラテン語のような母音の長短はないが、フィンランド語には日本語と同じように母音の長短があり、それがフィンランド人のラテン語を聞き取りやすくしているものと思われる。次に10月11日(日)午後6時23分、17800kHzで受信し、書き取ったものを下に掲げる。

NUNTII LATINI RADIOPHONIAE FINNICAE GENERALIS
in studio est Reijo Pitkäranta.

Die dominico in urbe Amstelodamo magna calamitas accidit cum aeroplanum onerarium SOCIETAIS AERONAUTICAE ISRAELIANAE in terram decidit et in duas insulas IX tabulatorum illisum est. ingenti displosione factaet aedificiis igne correptis saltem CCL homines vitam amiserunt. causa calamitatis vitiumquoddam techicum fuisse videtur quia aeroplanum sub ipsum casum in aeriportum redireconabatur.

Denalk Meeri candiatus partium dextrarum nomine 'Unionis Patriae' praesidens Estoniae electus est. suffragiis enim in parlamento facctis Meeri LIX vota sibi comparavit cum adversarius eius Arnokvitsel XXXI acciperet. Denalk Meeri aetate Unionis Sovieticae scriptor scientificus et dispositor cinematographicus erat et nuperrime munere legationis diplomatariae in Finnia fungebatur.

Ministri commercii Canadae, Mexici et Unitarum Civitatum tractatui de territorio liberae mercaturae constituendo subscripserunt. quae associatio compendiariis litteris NAFTA appellatur. Praesidens George Bush qui populum propter futuras electiones praesidentiales ambit iam tractatumlaudavit: illum effecisse ut in America Septentrionali teritorium mercaturae omnium ditissimum amplissimum et maxime lucrativum nasceretur.

Abimael Guzman dux Semitae Splehdidae sive motus belli calndestini Peruviani in tribunalimilitari in vincula sempiterna damnatus est. accusatus erat proditionis de caede XXV milium hominum et quod criminibus suis rei publicae ingentia damna attulisset. bellatores Semitae Splendidae se poenam ducis crudeliter ulturos esse minati sunt. itaque iam die Mercuii in vicinitate urbis Limae VII homines occiderunt.

Inter flumina Moenum et Danuvium canalis CLXX chilometra longus ductus et usu receptus est. quae moles his XXX annis acta viam fluminum a mari Germanico usque adPontum Euxinum patefecit. tutatores autem circumiectarum autumant illum canalem opus stratissimum post turrem Babelicam exstructam

essecum multis locis naturae damnum irreparabile intulerit.

'Lingua Russorum vocabulis Anglo-americanis depravatur.' ita quidem censet professor Jerdieni Serijaev moderator adiunctus instituti linguae Russicae primum quidem voces mutuatae omnibus acceptissimae videbantur quia vocabularium Russicum terminis ad capitalismum at ad technologiam pertinentibus care-reconstat. postquam autem multi homines praesertim iuvenes expressionibus Americanis etiam pro bonis patrii sermonis vocabulis uti coeperunt, qualitas linguae Russicae in discrimen vocata est. Finis nuntiorum huius septimanae, valete.

（日曜日、アムステルダム市で大事故発生。イスラエル航空の貨物機が墜落、10階建のアパート２棟に激突、爆発炎上し、少なくとも250人が死亡。事故機は墜落前空港に戻ろうとしており、技術的欠陥が原因と見られる。

右翼政党の「祖国連合」のデナルク・メーリがエストニアの大統領に選出された。議会で行われた投票でメーリ氏は59票を獲得、一方対抗馬のアルノクヴィツェルは31票であった。デナルク・メーリはソ連邦時代ＳＦ作家で映画監督でもあり、近年フィンランドの外交官も務めていた。

カナダ、メキシコ、カメリカ合衆国の貿易担当相はNAFTAという略称で呼ばれる自由貿易協定に調印した。大統領選のため選挙運動中のブッシュ大統領は「北アメリカに最も豊かな、最も広大な、極めて収益性の高い貿易圏ができる」と協定を礼賛した。

ペルーのゲリラ組織センデロ・ルミノソ（輝ける道）の指導者アビマエル・グスマンが終身刑の判決を受けた。２万５千人もの殺害を行い、国家に重大な損害を与えたことにより反逆罪で告発を受けていた。センデロ・ルミノソのゲリラは判決に報復を誓い、水曜日にはリマ近郊で７人が殺害された。

マイン河とドナウ河の間170キロが運河で結ばれた。30年の歳月をかけて北海から黒海への水路が通じたのである。しかし環境保護団体はバベルの塔以来の広大な事業は多くの地域で自然に取り返しのつかない損害を与えたと非難している。

「ロシア語は英語に汚染されている」とロシア語研究所の副所長エルディエニ・セリヤエフ教授は警告している。ロシア語には資本主義や先端技術に関する語彙が欠けているので初めのうちは借用語は全ての人に受け入れられてきたが、多くの人、特に若者たちが母国語に適切な表現があるにも関わらず米語の表現を使うようになったのでロシア語の質が危機を迎えている。）

語彙、構文も古典ラテン語に非常に近い、わかりやすいものになっている。aeroplanum（飛行機）、bellatores clandestini（ゲリラ）、tutatores circumiectarum（環境保護団体）など現代の事物を表す用語も妥当な所であろう。ただ大統領を表すにはラテン語雑誌等で今までpraesesが使われるのが普通であったが、近代語の形に近いpraesidensが採用された。また初期の放送ではアメリカ合衆国をFoederatae Civitates Americae Septentrionalisと読んできたが、最近ではやはり近代語の表現に近いUnitae Civitates で済ませているところが注目を引く。旧ソ連で大統領制を導入するとき、大統領という言葉がロシア語にないので英語からそのまま借用してプレジデントとしたと言うがヨーロッパのほとんど全ての言語が採用しているプレジデントをそのまま採用した方がすべての人にわかりやすく、聞き取りやすい。新しい、ジャーナリスト・ラテン語が成立したと言えるかもしれない。既に知っているニュースばかりラテン語で聞くというのはお遊び的感じがしないでもないが、航空機墜落のニュースはともかく、日本のマスコミではほんのわずかか、もしくは全く報道されない面白いニュースが多く、ラテン語が伝達手段としての貴重な役目を果たしているのである。

## まとめ

１度フランスのポー市在住のイメ夫妻を訪問したことがある。イメ氏はシチリア生まれのイタリア人、夫人はパリ生まれのフランス人であったが、結婚して以来二人は少なくともお互いの間ではラテン語以外の言葉を使わなかったという。一日中、ラテン語で考え、ラテン語で話をし、ラテン語で著述する、現代でもそんな家庭があるのである。なお、夫人は大変な名文家であり、かつ詩人でもあって、ヴァチカンのラテン散文・詩コンクール

などで多数の賞を獲得されている。自分の気持ちをラテン語で自由自在に表現できる人がいるのにどうしてラテン語が死語であるといえるのであろうか。筆者は個人的に面識はないが、優雅なラテン文を話し、書くことで世界的に名高い人を挙げれば、やはりヴァチカンのラテン語雑誌ラティーニタースを主宰されているカロルス・エッガー、ザールブリュッケン大学から発行されているラテン語雑誌「ラテン語の声」を主宰されているカエレスティス・アイヒェンゼーア神父であろう。お二人は長年に渡って、それぞれの雑誌の時事ニュースの記事を担当され、現代ラテン語の模範を提供されてきた。ザールブリュッケン大学、ミュンヘン大学ではラテン語による授業が健在であるが、ソキエタース・ラティーナ（現代ラテン語の会）主催により、その他の大学でもラテン語による巡回講演が定期的に開催されている。フィンランド放送によるラテン語ニュースは大きな反響を呼びながら3周年を迎えた。1991年10月パリでフィンランド政府後援の下に「ヨーロッパのかすがいとしてのラテン語」というテーマでシンポジウムが開かれた。フィンランド教育相の挨拶を含め、すべての討議がラテン語でなされたことは言うまでもないが、ヨーロッパの統合が進められているこの時期にフィンランド政府が現代ラテン語を公に認知、後援していることは注目に値する。フランスでテープ付の外国語学習教材としてアシミルの「涙なしの外国語」シリーズが有名でかるが、これには「涙なしのラテン語」も含まれている。クレマン・ドゼサールによるこの教材は完全に現代ラテン語会話読本である。古典の作品の引用も一部にはあるが、大部分は現代の事物を扱っており、同じシリーズの現代語の会話教本とまったく同じように現代ラテン語に習熟できるように編集されている。スウェーデンのエルベルクはもっと本格的なラテン語入門書「ナチュラル・メソッドによるラテン語」[13]を書いたが、これが近年改訂再版された。ラテン語会話のためのお膳立ては揃ってきた。倉田保雄氏がセーヌ河岸のブキニストをのぞいてラテン語で書かれたマンガ本が多数並んでいるのを見て、驚かれ、フランスにおけるラテン語教育の復活、フィンランド放送のことから「ラテン語ルネサンス」の胎動がＥＣ内で感じられていると日経紙上[14]で論じられているが、まさにその通りである。

アジアにおいて共通の言語、文化というようなものはなかったが、ヴェトナムから中国、朝鮮、日本という極東においては極東漢文化圏があり、漢字が普及し、知識人の教養として漢文がヨーロッパにおけるラテン語のような役割を果たしてきたとよく言われる。確かにかって漢文という媒体の基に知識が伝播されていったこと、知識人たちは必要とあれば、漢文で意思を通じ合うことができたことは事実である。しかし、日本の場合漢文は訓読という特殊なやり方で翻訳受容されたのであり、口頭による伝達など最初から考慮の対象ではなかった。ラテン語は文語であると同時に口語であり、異民族間の共通語となっていたのとは大いに趣を異にする。文語としての漢文は正史の言語として、また儒者たちの種々の著作に使われてきたが、それもほぼ幕末までで明治になってからは中江兆民の「民約訳解」が有名になった他は、小数の漢学者たちが趣味でほそぼそと著作を続けたがそれもすぐ逼塞してしまった。今日、趣味で漢詩を作っている人はいるが、文章となるとまったく聞かない。ベトナム、北朝鮮では漢字の全廃を断行し、中国でも極端な漢字の簡易化が行われ、漢字自体も極東共通ではなくなってしまった。中国人との共通語として現代中国語を学べばよいという意見もあるが、民族語にはどうしてもいデオロギーがつきまとう。文化大革命当時、日本の中国語学会は中国一辺倒であり、中国語の教科書までほとんどが毛沢東礼賛をやっていたが、これは一民族語を共通語とすることの危険をよく示している。

日本では想像できないかもしれないが、自分の民族の言語に誇りを持っている人々の間では大変な言語論争が起きかねない。インドで英語かヒンディー語のいずれか一つを各州の公用語にしようという政策のため多数の死者が出たことは記憶に新しい。英語はインドの諸民族にとって中立の言語のようにも思えるが、実際は過酷な植民地支配の怨念が残っていて英語の必修化は進まないのである。ヨーロッパで言語戦争がもっとも激しいのはオランダ系とフランス系の2民族が混在するベルギーで、相手の言語を話すか話さないかということで自治体の長が頻繁に辞職し、時には政権が倒れた。英仏の航空会社が協力して製作した超音

速機コンコルドのスペルを英語式にConcordとするかフランス語式にConcordeにするかで、激論が戦わされたという。確かに世界的に英語が一番普及している言語であるが、英語には英米という国家と切り離せない。英語の文法はヨーロッパの言語の中では比較的簡単ではあるが、スペル、発音は容易ではなく、語彙体系は尨大である。Ceylonの正しい発音は［silón］であるが、日本人の英語が得意という人の何パーセントが正しく発音できるであろうか。ベトナム戦争の残酷さを描いた映画にPlatoonという映画があるが、どういうわけか、皆「プラトーン」と言って怪しまない。英語なら当然「プラトゥーン」でなければならぬ。フィンランド放送のラテン語ニュースを聞いていてラテン語は何と聞き取りやすい言葉かと思う。英語ではアクセントがない音節は弱く、早く発音されるため、少し早く発音されると聞き取りにくくなるのであるが、ラテン語はすべての音節が同じようにはっきりと発音されるため非常に聞き取りやすいのである。ヨーロッパはギリシア・ローマという輝かしい共通の歴史を持つ。ラテン語への新しい関心はこの共通の文化遺産への自覚の高まりを暗示するものであろう。

**注**

(1) ベルセリウス、田中豊助・原田紀子訳『化学の教科書』p.159, 内田老鶴圃、1989年

(2) 同書、p.163

(3) *ARCHIVUM SOCIETATIS ZOOLOGICAE BOTANICAE FENNICAE "VANAMO"*, p.150, Helsinki, 1962

(4) *Der Spiegel,* 17, Jan. 1966

(5) 『公会議公文書全集』第7巻, p.201, 203, 中央出版社、昭和44年。

(6) J. Donat, *Cosmologia,* p.263, Barcelona, 1944.

(7) Josephus Franciscus Schutte S.J., *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia,* Roma, 1968.

(8) Philippus Soccorsi, *De Geometriis et Spatiis Non Eucledeis,*
*De Physica Quantica,*
*De Vi Cognitionis in Scientia Physica,*
Roma, 1958－1960.

(9) Antonius Freire, *Scripta Latina,* Bracara, 1985.

(10) René Saksa, *Lucere ubique lucernae caelestes,* quam narrationem ROCHUS HABITZKY e germanico in Latinum convertit, quam versionem retractatam CAELESTIS EICHENSEER perpolivit, Langenfeld, 1982.

(11) Bella Stoelinga, *Paene Autumnus,* in 'Melissa' No.48, p.12, Bruxelles, 1992.

(12) *VIVA CAMENA,* edita ab Iosepho Eberle, p.153, Zürig, 1961.

(13) Hans H. ΦRBERG, *Lingua Latina (per se illustrata) ab auctore retractatus et renovatus,* Hafnia, 1981, 1983, 1989, 1991.

(14) 日本経済新聞、1992年10月11日、倉田保雄「ＥＣ統合とラテン語ルネサンス」.

# 旧西独大統領ヴァイツゼッカーへの
# オックスフォード大学名誉学位授与証書
## 1988年6月22日

CANCELLARIVS MAGISTRI SCHOLARES VNIVERSITATIS OXONIENSIS OMNIBVS AD QVOS PRAESENTES LITTERAE PERVENERINT SALVTEM IN DOMINO SEMPITERNAM

CVM DIU EX MORE NOBIS FUERIT CIVITATUM EXTERNARUM PRAESIDES HONORARE, EOSQUE PRAESERTIM QUI OB MORES SPECTATOS INCLARUERINT QUIQUE POPULIS SOCIETATE EUROPAEA ET FOEDERE ATLANTICO NOBISCUM CONIUNCTIS PRAEFECTI SINT: CVMQUE VIR EXCELLENTISSIMUS

RICARDVS VON WEIZSAECKER

REI PUBLICAE GERMANICAE FOEDERATAE PRAESES, IN RE PUBLICA CAPESSENDA TEMPERANTIAE ATQUE MODESTIAE EXEMPLUM PRAECLARUM PROPOSUERIT, QUI URBIS BEROLINENSIS PRAETOR ELECTUS PRAESESQUE DEINDE GERMANIAE CREATUS STRENUE LABORAVERIT UT PARTES DIVERSAS IN CONCORDIAM ADDUCAT, QUAM OB REM AB OMNIBUS COLLAUDATUS SIT:
CVMQUE DEUM PIA REVERENTIA COLAT, QUI MUNERA DIU ECCLESIAE GERMANICAE EVANGELICAE CAUSA SUSCEPERIT, CONCILIO EIUS SUMMO PER ANNOS SEX PRAEFECTUS:
CVMQUE APUD SENATORES GERMANICOS ANNUM QUADRAGESIMUM POST BELLI ULTIMI FINEM CELEBRANTES ORATIONEM HUMANITATIS NOBILITATIS CANDORIS PLENAM PRONUNTIAVERIT, NEQUE DUBITAVERIT DE REBUS NEFANDIS APERTE VERBA FACERE, DE DOMINATIONE SCILICET ISTA INIUSTISSIMA ET CRUDELISSIMA DUCUM PRIORUM SAEVIS CUM FASCIBUS GRASSANTIUM: CUMQUE TALIA ETIAM IN CIVITATE IUDAEORUM ATQUE APUD LENINOPOLITAS LOCUTUS PLAUSU MAXIMO PLURIMORUM SALUTATUS SIT:
CVMQUE CIVIUM SUORUM ANIMOS PACI CONSULENDI, GENTES ALIAS ADIUVANDI STUDIOSORUM CONFIRMAVERIT:
CVMQUE ORATIONES PERMULTAS PRUDENTISSIME FECERIT DE PATRIAE AMORE, DE GERMANIA IN PARTES DUAS DIVISA, DE MURO ISTO BEROLINENSI, QUAE GERMANIS ULTRA FINES IAM EXCLUSIS SOLACIUM QUODDAM ET CONFIRMATIONEM PRAEBUERINT:
CVMQUE OXONIENSIS IAM SIT ATQUE ADEO BALLIOLENSIS, QUI STUDIA OLIM OXONIAE EXERCUERIT, SOCIORUM BALLIOLENSIUM DISCIPULUS FUERIT, SOCIUS IPSE NUPER HONORIS CAUSA CREATUS SIT, SOCIUS QUOQUE HONORIS CAUSA COLLEGI SANCTI ANTONI ELECTUS:
NOS ERGO, CUM PIETATEM QUAM ERGA ACADEMIAM NOSTRAM CONSERVAVIT TUM MENTEM EIUS APERTAM ET SINCERAM ADMIRATI, IN FREQUENTI CONGREGATIONIS DOMO PRAEDICTUM PRAESIDEM DOCTOREM IN IURE CIVILI RENUNTIAMUS EUMQUE VI AC VIRTUTE HUIUS DIPLOMATIS OMNIBUS IURIBUS ET PRIVILEGIIS ADFICIMUS QUAE AD HUNC GRADUM SPECTANT.
IN CVIVS REI TESTIMONIVM SIGILLUM UNIVERSITATIS QUO HAC IN PARTE UTIMUR ADPONENDUM CURAVIMUS.
DATUM IN DOMO NOSTRA CONGREGATIONIS DIE XXII° MENSIS IUNII A.S. MCMLXXXVIII.

*Admission by the chancellor*

Germanorum Praeses humanissime, Britannorum fautor benevolentissime, pacis propugnator acerrime, totius Europae decus ac columen, ego auctoritate mea et totius Universitatis nec non vi ac virtute huius Diplomatis admitto te ad gradum Doctoris in Iure Civili.

（谷論文参考資料）